



ヒルダ

闇の中...

1 【人形】

僕が、最初のその少女を見た時に思った事は……ひとつ……

『まるで人形のような少女だ……』

と言う事だった。

ヒルディガルド……いやヒルダは、本当に西洋のビスクドールを思わす様な少女だった。

小柄で華奢な姿と陶磁器の様な白い肌、細く長く伸びている手足は、何処となく現実離れした印象を与えてくれた。そして金の糸を思わせる前髪と眼鏡が、両の瞳を軽く隠しており、その金の髪と眼鏡の奥に隠れた蒼い瞳は、僕の方へと不安そうな視線を向けていた。

「こんにちは」

僕は膝を折り、軽く屈み込みながら、母親の後ろに隠れながら……それでも僕の方を見てくれている少女に目線を合わせながら、出来るだけ優しく声をかける。

「!？」

驚いたように少女は、更に母の身体へと身を隠してしがみつくが、それでも母親に促されるようにしながら、オズオズと母親の影から出て来る。

僕は出来るだけ優しい笑顔を少女へと向ける……やがて少女は、母親と僕を交互に何度も見た末に、その赤い唇を小さく動かし、澄んだ鈴音の様な声で僕に挨拶をしてくれる。

「え、ええと……おにいちゃん、こんにちは……あの……私と……ヒルダと、これからずっと、なかよくしてくれませんか？」

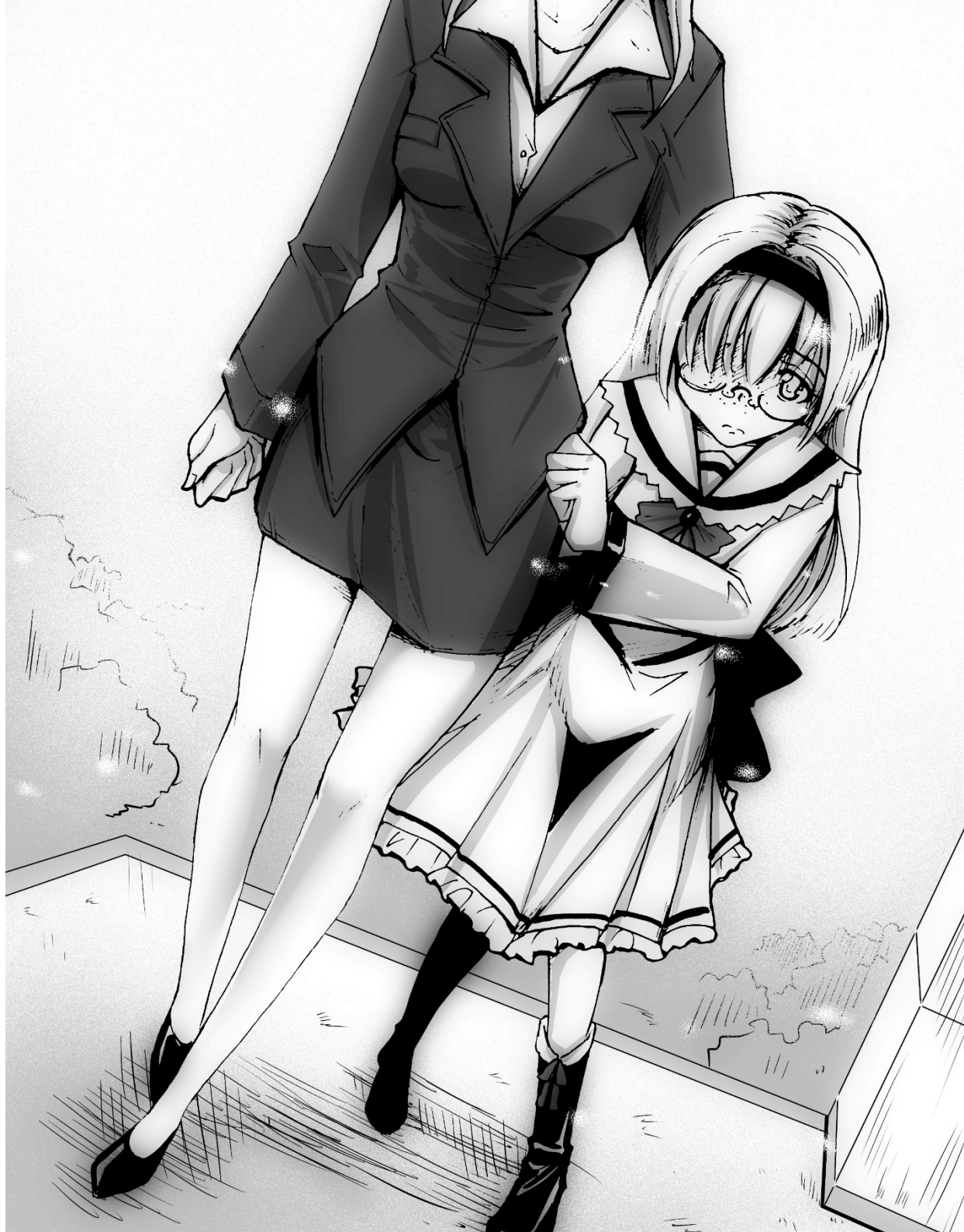
そう言いながら、ビクビクとヒルダの手が僕の方へと差し出された。ガラス細工を思わせるような細く小さく、そして桜色の爪を持つ指先を見た時に、僕は一瞬の戸惑いを見せてしまう。

何故なら、その差し出された手が、あまりにも小さく華奢であったために、触れると壊れてしまうような気がしたからだ……だがその後、その差し出された小さな手を、僕の両手で優しく包み込むようにしながら言った。

「僕の方こそ、これからずっと仲良くしてくださいね、御願います。ヒルダちゃん」
その瞬間に緊張の余りに蒼白であったヒルダの顔は、一瞬で紅潮したかと思うと、まるで可憐な花が開いたような笑顔になり、その笑顔のまま僕の方へと抱きついてきた。
「うわっ!」

その唐突とも言えるヒルダの豹変に、僕は驚きの声を出す、本当に驚いたのは次の瞬間だった。

「お兄ちゃん、ありがとう! 日本で、ヒルダの初めてのお友達になってくれて、お兄



ちゃん大好き！」

そう言うなりヒルダの小さな唇は、僕の頬へと触れキスをする。

柔らかなヒルダの唇の感触……そう、この瞬間から僕は、ヒルダの虜になってしまった。



「ねえお兄ちゃん、この浴衣……どうかな？　ヒルダにどうかな、似合っているかな……ぜったい似合っているよね？」

下ろしたばかりの浴衣に身を包んだヒルダが、長椅子に座っている僕の目の前でくると身体を回転させる。そんな身体の動きを追うかのように、長く伸ばされている金髪も、ふわりといっしょに回ってたなびく……蛍光灯に反射してきらめく金の髪……どこか人ではない、さながら異世界の妖精を思わせる姿に、僕は眼を細める。

「ねえ、お兄ちゃん……どこかおかしな所ないかな？　ないよね？」

嬉しそうでいながら、どこか恥かしそうな表情のヒルダ、その白い肌や顔が少し紅潮しているのは、入浴を終えたばかりだけではなく、初めて着た浴衣の肌触りと姿に興奮しているせいもあるのだろう。そんなヒルダは、前髪と眼鏡によって隠れているが、よく見ればそれと解る蒼い瞳をキラキラとさせながら嬉しそうだ。

そのヒルダが身に着けている浴衣は、蒼を基調にした涼しげ浴衣地に淡く染められている桔梗の花柄で、どちらかと言えば大人びた印象を与える落ち着いた代物である。地味な印象を与えかねない柄であるが、着ている人間がヒルダであるとすれば、話は別となり実に良く似合っているといえた。

「ああ大丈夫、ヒルダにとても良く似合っているよ」

僕は、ヒルダから少し視線を離して、少し面倒臭そうな口調をわざと入れて言う。

「お兄ちゃん！　もっとしっかり見て言っつてよ！」

少しだけ不満そうな声でヒルダが言う。

僕は長椅子から立ち上がって、頬を少し膨らませているヒルダの頭に手を置き優しく撫でながら言う。

「うん、本当に良く似合っているよ」

ヒルダがパフン！　と何時ものように僕に飛びついてくる。初めて会った時と同じように、その柔らかな身体の全てを使って、どこか甘えたような素振りや身体をすりつけ続ける。

「それじゃ、早くお祭に行こうよ、お兄ちゃん」

そう言いながら、今度は僕の腕を掴んで引っ張る。苦笑しながらも僕は、机の上に置いてあった薬とコップをヒルダの方へと差し出して言う。

「その前に薬をキチンと飲んで、そうしないと発作をまた起こしてしまうからね」

ヒルダは身体少し弱い、それほど極端では無いが定期的に服用しなければいけない薬が何種類もあり、これもそのうちの一つであった。



「……うん」

少しだけヒルダが哀しそうな表情になる。ヒルダは知っているのだ。自分が病弱であり、そのため両親や周囲の人達に多大な苦勞をかけているという事を、だから必要な事ではあるが薬を飲むという行為に対して、少なからず抵抗感と言うか罪悪感に似た感情を持っている。

差し出された薬を、コップに注がれている水でコクコクと飲むヒルダ、その姿を見ながら僕は考える。ヒルダは知らないのだと言う事を……今飲んでいるコップの水の中に、僕があるモノを混入させているという事を……

「んぐう、んぐ……ぶはあく！ 全部のんだよ、だからお兄ちゃん、早くお祭に行こう！」

薬を飲んだヒルダが、再び僕の手を掴んで引っ張る。僕はヒルダに手を引かれてマンションから出て行く、近所の神社で行なわれている夏祭りの会場へと向かうために……

僕が住んでいるマンション、その近所の神社で夏祭りが開かれるという事をヒルダに話したのは、数週間前の事だった。

そして、その夏祭りを見物したいと、滅多に我俣を言わなくなったヒルダが、両親にせがんで僕の住むマンションに来たのは昨日の事だった。

無論のこと事前に話は聞いている。仕事の忙しいヒルダの両親に頼まれて少しの間だけ、僕はヒルダをマンションに泊める事になったのだ。小さな頃から僕を兄のように思っただけで慕ってくれているヒルダ、ヒルダの両親達も僕を信頼し安心して一人娘を預ける事が出来たのであろう。

ただ、それは大いなる間違いである……ヒルダの両親が、もし僕がヒルダに対して抱いている感情を知り得ていたのなら、ヒルダの両親は僕の下へヒルダを超越す事は無かったであらうし、そしてヒルダ自身も来ようなどと考える事はなかった筈だ。

何時の頃からであろうか？

初めてヒルダに会った時に感じた印象……少女人形を思わせるその姿が、少しずつ少女から女性へと変化して行くのを僕は見守り続けていた。

さながら固い花の蕾が、少しずつ緩みながら花開いて行く様子……僕は、そんなヒルダの成長を見守り続けていた。だけど同時に僕は、そんな大切な存在であるヒルダを壊してしまいたいと考える様になって……

最初は冗談にもならない考えだと気にも留めなかった。次には冗談でも性質が悪すぎると、そんな事を冗談でも考えた自分を嫌悪した。そして気がつけば沸き上がってくるその感情を必死に否定し続ける僕が存在していた。

この感情の変化に気がつき、ヒルダを僕と言う人間から守る為に、ヒルダと距離を取り遠ざけた時期があった。これ以上ヒルダを僕の傍に置いていたら、取り返しがつかない事を引き起こしてしまうのではと言う恐怖を感じたからだ。

ヒルダを壊してしまいたい……その思いが膨らみだしながらも、僕はヒルダを壊したくなかったのだ。

無防備に素のままに全身で僕の胸へと飛び込んでくるヒルダ……その信頼と愛情を裏切ると言う事など、僕は死んでもしたく無かったし出来ないと思っていた……だから僕はヒルダを遠ざけ……そう僕は……ヒルダを守る為に、ヒルダから逃げ出した。

だがヒルダは、自分を突然に避け始めた僕の意図など解る筈も無い、それどころか自分が僕に嫌われたと思ひ込み、その事から病気を悪化させてしまった。元々病弱であり体が弱い娘である。精神が弱れば肉体も同様に弱って行ってしまうのは、当然の事だったのかも知れない、元気を無くし衰弱して行くヒルダの姿に、ヒルダの両親は僕の所へとやって来て、以前の様にヒルダと会って仲良くして欲しいと懇願した。

最初は何かと理由を付けながら言葉を濁し続けた僕であったが、ヒルダが入院したと言う事を聞かされ、それならば病院へヒルダを見舞うだけ……と言う条件で、僕は再びヒルダに会う事を了承した。

そしてヒルダの両親が尋ねてきた翌日、僕は白く清潔な……それ故にどこか無機質な印象と冷たさを感じさせる病院の長い廊下を、ヒルダが居る病室へと歩いていった。

ヒルダに会って何を言えば良いのか解らない、何と声を掛けてよいのか解らない……辿り着いたヒルダが居る病室の前で、僕は途方にくれ、散々に躊躇った末に……ドアノブに手を掛け、病室のドアを開けた。

「やあ、ヒル……」

ヒルダの名を言おうとした僕の言葉が途中で途切れる……部屋を間違えたと言うわけではない、病室の中にはヒルダが居た……上半身のパジャマを脱いで、半裸になった姿で……

もともと色白なヒルダ……入院生活によって、その白い肌が透けるように更に白くなり、その皮膚の下を通る血管を薄く浮き出させている。

そして白い肌の中、微かに膨らみを見せ始めている二つの丘……その中心だけが、微妙で淡い彩を小さく形作っているのを僕は、驚きの中で心に刻み込んだ。

「お兄ちゃん！」

上半身を肌蹴させたままの姿で、ヒルダはベッドから飛び降りると、呆然と立ち尽くしている僕の方へと駆け寄る……いや、駆け寄ろうとしたのだが、僕の所へと来る前に足をもつれさせ、ガクンッ！と身体をよろけさせ転びそうになる。

「危ない！」

転びそうになったヒルダの身体を、僕は辛うじて支える事ができた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

僕にしがみつきなながら、僕の事をお兄ちゃんと呼び続けるヒルダ、微かに匂う汗は不快ではなく、逆に僕の鼻腔を優しく撫でる様であり、押し付けられた柔らかだが、その白い肌の下にある薄い肉と脂肪の感触、それを通して感じる華奢な骨格……辛うじて膨らみかけている胸が押し当てられている個所だけが、ヒルダの中に目覚め始めている女性を感じさせた。

これは後で聞いた事なのだが、僕が久しぶりにお見舞いに来ると言う事を聞いたヒ



ルダは、長期の入院でお風呂に入る事もできずに汗臭くなった身体（と思い込み）を恥かしいと思い、せめて身体だけでも僕が来る前に、拭き清めて欲しいと母親に頼み込んで、身体を拭いて貰っていたらしい、病室のドアを開ける前、僕がノックをして訪問を告げていたのなら、パジャマの上を脱いで、母親に身体を拭いてもらっている最中と言う場面には出くわさなかった筈だ。

「お兄ちゃん、嫌いにならないで、ヒルダ良い子になるから、御願いだからヒルダの事を嫌いにならないでえ！ お兄ちゃん、御願いだからヒルダのお友達のまままでいて、わたし！ お兄ちゃんの事が大好きなの……だから何時までも、ヒルダのそばにいて！ わがままでもいいから、わがまま言わないから、お兄ちゃんに迷惑をかける悪い子だけど、もう迷惑をかけないようにするから、おにいちゃん……おねがい……ヒルダのこと嫌いにならないで、何でもするから、ヒルダの大好きなお兄ちゃんできて、ヒルダのことが大好きなお兄ちゃんできて……おねがい……おねがい……おねがいだから……」

上半身裸のまま、ヒルダは僕に身体を擦り付けながら……泣きながら、同じ言葉を繰り返す。

……私の事を嫌いにならないで……おともだちのまままでいて……おにいちゃんが大好きなの……おねがい……おねがい……と、母親が僕からヒルダの身体を引き剥がすまで、まるで赤ん坊のように泣きながら、僕の胸の中で言い続けた。

そして僕は、再びヒルダの下に頻繁に通うようになり、前の様に……前以上に顔を合わせる様になった。そして少しずつ元気を取り戻したヒルダは、以前にも増して僕を心の底から信頼して機会がある毎に、僕が住むマンションへやって来るようになる。

その度にヒルダは僕の中へと飛び込んできて、無邪気に膨らみ始めた胸を押し付け、僕の頬に親愛のキッスをし、無防備な姿態を僕に見せ続ける。

そんなヒルダの姿を見ながら僕は耐え続けた……可愛いヒルダ、優しいヒルダ、可憐なヒルダ、愛しいヒルダ、妹のようなヒルダ……そのヒルダの全てを、自らの手によって壊してしまいたいという、醜悪で反吐が出るような欲望から……

もしも僕が望んだのなら、ヒルダはその全てを……心も肉体も……その両方を喜んで、僕に与えてくれる筈だ……そう思うのは僕の自惚れだろうか？

だが僕がヒルダに求めている事は、その様な僕とヒルダの二人が満たされた上での行為ではなく……僕がヒルダに求めているモノ……それは優しく微笑を浮かべているヒルダが、苦痛に表情を歪ませる瞬間……僕の事が好きだと小さく囁く小鳥のような声ではなく、小動物の断末魔を思わせるような悲痛な叫び……無垢な場所を僕に見せ羞恥に染まる姿ではなく、引き裂かれた服の残骸を貼り付け逃げ惑う姿……そんな捻じ曲がった欲望……それが僕が……ヒルダに求めている全てだった……何故なら僕は、そんな人間だったのだから……

そして数ヶ月……すでに僕の中にある良心と自制心は擦り切れ、もはや限界が来ていた……だが最後に残された欠片の様な理性によって、僕は耐え続けていた……ヒルダを壊したくないと言う思い、ヒルダを壊したいと言う思い、ヒルダと何時までも過ご



していたという思い……もしも僕の真の望みを知られたら、この望みを実行へと移したなら、ヒルダは僕の元から放れて行く事になるだろう……そんな狂い出しそうな狂気の狭間の末に僕は一つの妥協をした。

一度だけ……一度だけ、ヒルダを壊してしまおう……と、そして壊したヒルダを、僕が再び治してやろうと……だから僕は、ヒルダに悟られない様にして、ヒルダにとって僕が何時までも優しく頼りになる兄であり、保護者であり続けようと思った……



夏祭りは絶好の機会であった。

葉と一緒に飲んだ水の中に仕込んだ利尿剤、そして夏祭りの会場ではジュースやカキ氷などをヒルダに与えるように僕はする……結果はすぐに現れた。

ごく自然な結果として尿意を覚えたヒルダ、だがそれを僕に言う事が恥かしいようである。僕は気がつかない振りをしてヒルダと夏祭りの会場を歩き回り、もじもじし始めているヒルダを連れまわし続けた。

「あの、お兄ちゃん……ちよつとごめんなさい、あの用事思いでして……あの、お友達に携帯しなくちゃいけないくて、すぐに戻ってくるから！　少しだけここで待っていて！　ごめんなさい！」

そう言うと、僕の返事を聞く前に仮設トイレが設置されているであろう場所へと消えて行った。

僕はその後姿を見送りながら、ゆっくりと歩き出した。

仮設トイレは、夏祭りの会場に何箇所も設置されていたが、絶対的な数は少なかつた。

それでも10分も待てば何とか順番がまわってくるのだが、限界まで尿意を我慢していたヒルダにとってそれは、あまりにも絶望的な待ち時間であったのだろう。

順番待ちをしている人達へと、どこか焦った様な表情を向けたヒルダは、ほんの少しだけ周囲を見回した末

に、神社の裏手の方へと消えて行く……そう今日の午前中、お祭りの会場となる場所に、事前の下見だといってヒルダを連れてきた時に僕は、神社の裏手にある空地へとヒルダを誘い出し、冗談半分に行った。

『ここは夜になったら、お化けがでるからと言う話で、人が誰も来なくなるんだ……なんだったら肝試しに今度来るかい？』

『嫌だよお兄ちゃん、夜にこんな場所に来るなんて怖いから絶対に嫌！　でもね、お兄ちゃんといっしょなら来てもいいかな？　お兄ちゃんといっしょなら、どんな場所でもヒルダは大丈夫だもん！　ねえ、それでしよう……お兄ちゃん？』

そう言いながら、僕の腕をぎゅつと掴んだヒルダの姿……僕の事を、僕の全てを信じきっているヒルダの姿を僕は思い出しながら、ヒルダが消えて行った神社の裏手にあ

る空地へと、僕はゆっくりと歩いていった……誰にも見咎められない様に気をつけながら……

神社の裏手へとかけて行くヒルダの後姿を見ながら、僕は溜息をついて独り言のよう言う。

「こんな素敵な計画なんて、失敗してくれた方が良かったのにな……」

それは、ある意味本音であった。

全て自分が計算し計画したとおりに進んでいる。午前中にヒルダを神社の裏手にある空地へと案内したのも、この計画の一部であった。尿意を覚えたヒルダがトイレの順番を待ちきれずに、この人気のない空地へと、小便をするために赴くであろうと想定していたのだ。

もしもヒルダがタイミング良く尿意を覚えなかったら？ もしもトイレの順番がすぐにもまわって来たなら？ この場所を思い出さなかったなら？ この場所へ来る事を躊躇ったなら？ 自分が計画したヒルダを壊す……凌辱する計画は、穴だらけであり成功する可能性の方が遥かに少ない計画であった筈なのに、計画は順調に進んでいる。どこかで計画通りに行かなければ、その時点で諦める事ができる計画でもあった。失敗すれば二つの思いに引き裂かれそうな日々がまた続く……それだけの話なのだから……

だが計画は順調に進んでいる。すでに引き返す事は出来ない、する気もなくなった！ やがてヒルダが草叢の中に座り込む、僕は用意した品物を確認して身に着けはじめ。着ていたヒルダと揃いの浴衣を脱ぎ、用意してきたTシャツを着る（下半身はトラックス一枚のままだ）目隠し用のアイマスクと布、そして手足を戒めるための布テープを持つ、全ての準備を終えて僕は、ヒルダが座り込んでいるであろう草叢へと近寄って行った。



2 【大好き！】

私はお兄ちゃんの事が大好きだ。

お兄ちゃんと初めて会ったのは、数年前の事……生まれ育った国から、見知らぬ異国へと両親に連れられて来た私は、とても不安で怖かった。

自分でも解っている……私は、人と仲良くなる事がとても苦手で、生まれ育った国から、この国にへとお母さんとお父さんに連れられて来た当初、私は学校に通うとき以外は、滅多に家の外へ出る事無く過ごしていたし、学校でも何時も一人で過ごしていた。

お友達をつくろうともしないで、家の中に閉じ籠り続ける私を心配したのか、お母さんは少し離れた所にあるマンションの一室へと私を連れてきてくれた。そのマンションに居た人は、お母さんの遠い親戚にあたる人で、お母さんが弟の様に思っていると聞いていた人だった。

初めて会った男の人……自分でも人見知りをしてしまう方だと思っている。何故なら私の瞳を隠している前髪と眼鏡は、他の人から私と言う人間を隠す壁の様な物だったから、だから私はお母さんの陰に隠れ続ける……たけどお母さんに促されて、ようやく……いま考えても、とても小さな声で、怖かったけど声を絞り出して言う。

「え、ええと……おにいちゃん、こんにちは……あの……私と……ヒルダと、これからずっと、なかよくしてくれませんか？」

本当に怖かった……それでも私は、手をビクビクしながら男の人の方へと差し出す……そして私が差し出した手を、その男の人は優しく両手で包み込むようにしながら握り締め、優しい声で言ってくれた。

「僕の方こそ、これからずっと仲良くしてくださいね、御願います。ヒルダちゃん」嬉しかった。この国にきて初めてのお友達が出来たと思った。私は嬉しさの余り、その場で男の人に抱きついてしまう。

急な私の行動に驚いた男の人が、声を出したけど私は構わない！

「おにいちゃん、ありがとう！ ヒルダの初めてのお友達になってくれて、おにいちゃん大好き！」

私はそう言って、おにいちゃんの頬へ嬉しさと感謝と……大好きだよと、キスをした。

この時から私は、その男の人……おにいちゃんの事が、お父さんやお母さんよりも一番大好きになった。

お兄ちゃんに会う事が楽しい、お兄ちゃんとお話をする事が嬉しい、お兄ちゃんと一緒に居る事が大好き！

……だから私は、知らず知らずの内に我侷になっていたのかも知れない……

何時の間にか、お兄ちゃんは私の事を避け始めていた……

時々私の家に来てくれていたお兄ちゃんが来なくなる……お兄ちゃんのマンションに遊びに行つて良いですかと聞いても断られてしまう……電話をしても、ろくに話をする間もなく切られてしまう……そう……私は何時の間にか、お兄ちゃんに嫌われてしまつていた。

何でも言う事を聞いてくれるお兄ちゃん……我侬を言い過ぎたのかもしれない……迷惑をかけ過ぎたのかもしれない……悪い子になつていたのかも知れない……だから私はおにいちゃんに嫌われてしまつたんだ……

お兄ちゃんに会えない事とお兄ちゃんに嫌われた事……それが哀しくて、苦しくて、耐え切れなくて……私は病院に入院してしまつた。

もともと身体が弱くて、周囲の人達に迷惑をかけ続けていた私……だからお兄ちゃんも、私の事が嫌いになつたのかも知れない……そんな事ばかりを考え、病院のベッドの上で過ごす日々……このまま死んでしまいたい……そんな事も考えてしまう。

だけどそんなある日、お母さんが言つてくれた！

『明日、ヒルダが大好きなお兄ちゃんが、お見舞いに来てくれるのよ……』と！

前の晩、私は嬉しさの余り眠る事ができなかつた。そしてお兄ちゃんが来てくれる日になつて急に気が付く、私が暫くお風呂に入つていなかった事に、クンクンと身体の臭いがかぐと、何となく汗臭いように思えてくる。

お兄ちゃんが来る前にお風呂に入りたいと言う私に、お母さんはお風呂に入るのは無理だけど、タオルで身体を拭いてくれると言つてくれた。だから私は、お母さんに身体を急いで拭いてくれるように御願ひする……お兄ちゃんが来る前に、汗臭い身体の臭いを嗅がれない様にと……

だけど母さんに身体を拭いてもらっている最中に、お兄ちゃんは突然にお見舞いに来てくれた。

病室のドアが開く音に気が付き、音がした方へと眼を向けた瞬間……そこにお兄ちゃんが立つていた……お兄ちゃんが来てくれた！

「お兄ちゃん！」

寝巻きをはだけたまま、私はベッドから飛び降りると、お兄ちゃんの方へ行こうとした……だけどおにいちゃんの所へと行き着く前に、私は足をもつれさせ転びそうになる。

「危ない！」

転びそうになつた私の身体を、お兄ちゃんが支えてくれた……久しぶりに感じる事が出来たお兄ちゃんの腕の優しさ……私は、そのままお兄ちゃんの身体にすがりつく

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、お兄ちゃん！」

お兄ちゃんにしがみついて、私はお兄ちゃんを呼び続ける。離れたくない、このまま抱きついていたい、もうお兄ちゃんと離れるのは嫌だ！

だから私は、お兄ちゃんに抱きつきながら、泣きながら、大きな声で言い続けた。

「お兄ちゃん、嫌いにならないで、ヒルダ良い子になるから、御願ひだからヒルダの事



を嫌いにならないでえ！ お兄ちゃん、御願いだからヒルダのお友達のまままでいて、わたし！ お兄ちゃんの事が大好きなの……だから何時までも、ヒルダのそばにいて！ わがままでもいいから、わがまま言わないから、お兄ちゃんに迷惑をかける悪い子だけど、もう迷惑をかけないようにするから、おにいちゃん……おねがい……ヒルダのことが大好きならなくて、何でもするから、ヒルダの大好きなお兄ちゃんできて、ヒルダのことが大好きなお兄ちゃんできて……おねがい……おねがい……おねがいだから……」

もう何を言っているのかも解らない、ただお兄ちゃんの温もりが欲しくて、お兄ちゃんと離れたくなくて……私は何度も言い続けた。

私の事を嫌いにならないで……おともだちのまままでいて……おにいちゃんが大好きなの……おねがい……おねがい……と、お母さんが私の身体を、お兄ちゃんから引き剥がすまで……引き剥がされてベッドに戻っても、まるで赤ちゃんのように泣きながら言い続けた。そしてお兄ちゃんは、私の傍にまた居てくれる様になった。

こんな自分を私は現金な性格だな……と、思ってしまった。

お兄ちゃんが病院に来てくれる様になって、お兄ちゃんと前の様にお話をする事が出来る様になって、お兄ちゃんをギュツ！ と抱きしめる事が出来る様になって、そんな私をお兄ちゃんが、ギュツ！ と抱きしめ返してくれる様になって……私は、とても元気になることが出来て、病院から退院する事が出来た。

そして私はお兄ちゃんの所へと頻繁に通うようになる。お兄ちゃんが住んでいるマンションへと、何かと理由をつけては行くようになった。

大好きなお兄ちゃん……私の事を大事に思ってくれて、私の事を心配してくれて、私の事を好きでいてくれる……本当に大好きなお兄ちゃん……そして私は、私の心の中を知る……お兄ちゃんを、お兄ちゃんとして大好きなだけではない事を……私はお兄ちゃんを、一人の男の人として好きなんだと言う事を……

それを本当に意識したのは数ヶ月前の事、家で一人だけお留守番をしていた時、突然に痛くなるお腹……ヌルリとした感触を感じ、慌ててトイレに行って、パンツを脱いだ時、私の眼に飛び込んで来たのは、パンツに付着した大量の血だった。

驚き、怖くなって、パニックになって、どうしたらいいか解らなくなってしまった末に思い出したのは、学校で習った事……女の子だけが集められて見せられたビデオと、保健の先生からの説明……お仕事から帰ってきたお母さんに、私はその事を言ったら……お赤飯を炊いてくれた。

そしてお母さんは言う……これでヒルダも女の子になったのよと、何となく解らないけど、なんとなく解る……私は、赤ちゃんを生む事が出来るようになったんだと、そして私は、お母さんが読んでいた本を、こっそりと盗み見して知る……男の人と女の人が、本当にお互いの事を好きになっただけなら……セックスと言う言葉の意味と行為……もしもお兄ちゃんが、私の事を本当に好きになってくれて、お兄ちゃんが私と……セックスをしたいと言ってくれたなら……私は……恥かしいけど……お兄ちゃんとセックスをする……そして、お兄ちゃんと私の赤ちゃんを産む事ができるんだと！



だから私は待っている……お兄ちゃんが、私の事を本当に好きになっただけで、私の事を女の子として好きだと言ってくれて、そしてセックスをしたいと言ってくれる時の事を……だから私は待ち続ける……お兄ちゃんが、私の事を好きだと言ってくれる日を、そしてセックスをしてくれる日を……期待しながら……何時も待っている……

なのにお兄ちゃんは、私の事を何時も子ども扱いする。もうちゃんと女の子になったのに……それが少しだけ悔しくて不満だけど、あまり我俣を言う事はできない……だってお兄ちゃんにまた嫌われてしまったら、私は本当に死んでしまうから、だから私は我俣を言う事も無く、いまはお兄ちゃんの傍にいたい事だけで満足しようと思っっている……本当にそれだけでも私は、とても幸せを感じる事が出来から……

だけにお兄ちゃんから、お祭りがお兄ちゃんのマンションの近くで行われる事を聞いた時……私は我俣を言ってしまう。

お兄ちゃんと一緒にお祭りを見て歩きたい、もちろんそれは嘘ではないけど、お兄ちゃんのマンションにお泊りをすると言う事が本当の目的、お兄ちゃんのお部屋で一緒に夜を過ごすと言う事、こっそり読んだ本に書かれていた、男の人と女の人のお話の様な出来事……私はひそかに、お兄ちゃんと一緒に過ごす事になる夜に胸をドキドキとさせた。

だから滅多に言わない我俣を言っただけで、私はお兄ちゃんの家にお泊りをする事をお母さんとお父さん、そしてお兄ちゃんに御願いを聞いてもらった。

そしてお祭りの日、朝早くから私はお兄ちゃんの所へ来た。まだ時間が早いのに、お兄ちゃんはお祭り会場の下見に、私を連れて行ってくれて、いろんな場所を案内してくれた。

着々と進んで行くお祭りの出店、まだお祭りが始まっていないのに出てくる沢山の人が、そしてお化けが出るかも知れないと、お兄ちゃんに脅かされた神社の裏の方……

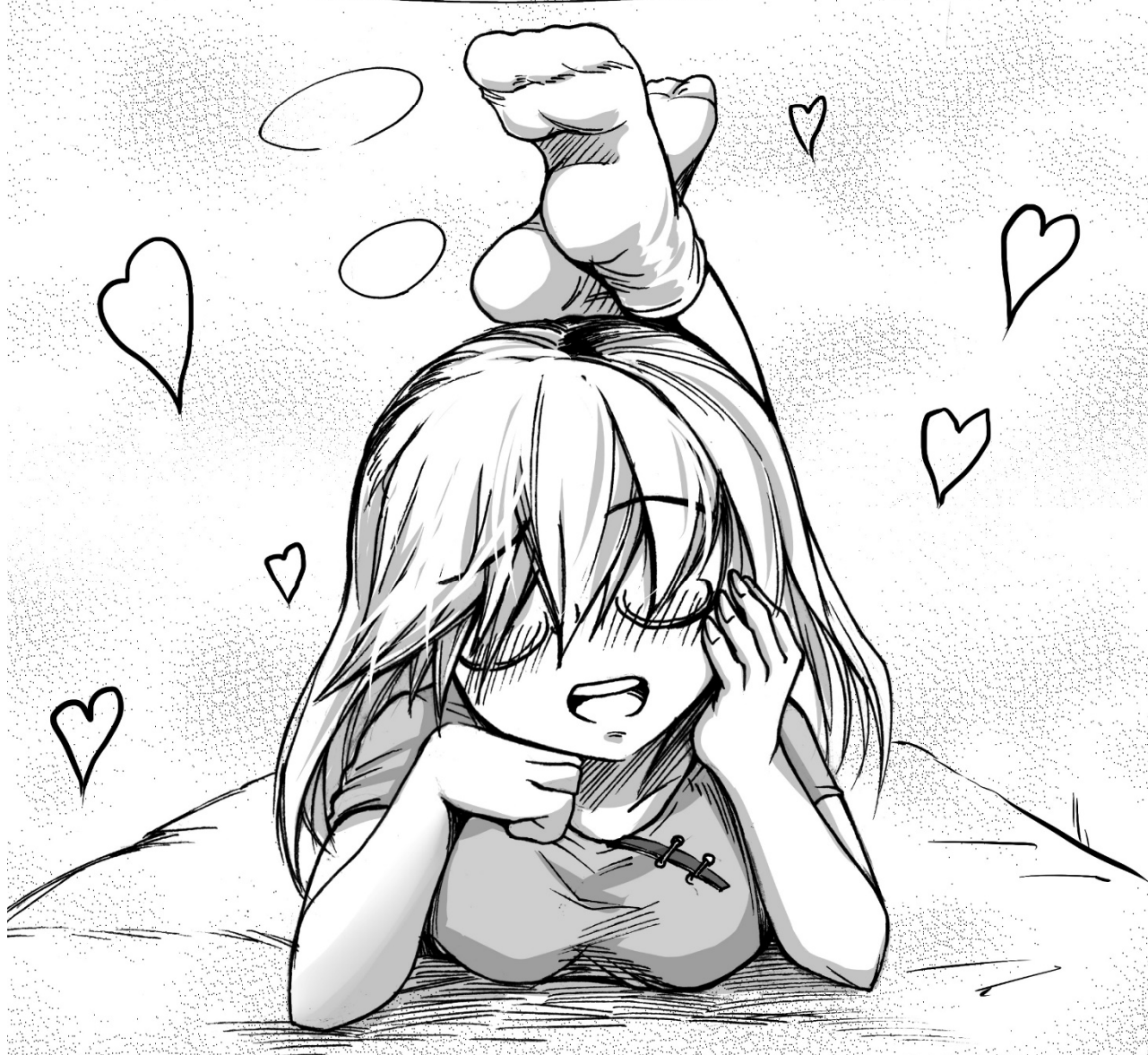
私は嬉しくて、お風呂に入った後に、すぐに浴衣に着替えてお兄ちゃんに、その浴衣姿を見てもらう……お母さんには、少し地味なので別の柄にしたらと言われたけれど、私は一目見て気に入ったから（本当は白とピンクで、金魚が描かれていた浴衣もいいかななど思ったけど、なんか子供っぽくて、お兄ちゃんと一緒にお祭りを見て歩くのには似合わない気がしたから）私が気に入った浴衣……青色の布地に薄く描かれているお花が（桔梗という花だとお母さんは言っていた）、綺麗で何となく大人っぽくて、それを着てお兄ちゃんとお祭りの会場を歩く私の姿を想像して……本当に気に入った浴衣だった。

「ねえお兄ちゃん、この浴衣……どうかな？ ヒルダにどうかな、似合っているかな……ぜったい似合っているよね？」

浴衣の着付けはお母さんに何度も教わった、はたして本当に上手に着る事ができたのか、そして浴衣が私に似合っているか……少しだけ不安になって、着たばかりの浴衣姿で、椅子に座っているお兄ちゃんの前で、くるりと身体を回転させて見せてみる。

「ねえ、お兄ちゃん……どこかおかしな所ないかな？ ないよね？」

髪の間になんか少しだけ隠した目で、お兄ちゃんの反応を確かめてみる……変な所が無い



だろうか？ 似合うと言ってくるだろうか？ 少しだけ……ううん、とてもドキドキしながらお兄ちゃんの返事を私は待つ……

「ああ大丈夫、ヒルダにとても良く似合っているよ」

お兄ちゃんは、似合うよと言ってくれた……言ってくれたけど、なんだかじつくりと私の浴衣姿を見てくれない様な気が……

「お兄ちゃん！ もっとしつかり見て言ってよ！」

ちよつとだけ不満そうな声を出してしまう。だって、この浴衣はお兄ちゃんに見て欲しかったから、なのにお兄ちゃんは、ちゃんと見てくれない！

気が付いたら、頬っぺたを膨らましている私があった……それがなんだか子供っぽくて嫌だなと思うけど、それを止める事ができなかった。

「うん、本当に良く似合っているよ」

ポンッ！ とお兄ちゃんの手が、私の頭にのせられて優しくなでられる……また子ども扱いされている……という不満が少しだけあったけど、お兄ちゃんに頭を撫で撫でされるのは大好きだ。

何時の間にか、私の機嫌は治っている。そして私は、パフン！ と何時ものようにお兄ちゃんの腕の中に飛び込んで、思いつき身体を摺り寄せ、甘えるような声を出して言う。

「それじゃ、早くお祭りに行こうよ、お兄ちゃん」

早くお祭りに行つて、お兄ちゃんとお祭りの会場を歩きたい！ 他の人は、私と兄ちゃんをどんな関係だと見てくれるかな……兄と妹？ それとも……恋人同士だと思つてくれるかな？ そんな事を考えると、早く私はお祭りの会場へと、お兄ちゃんで行きたかった。

早く早くと、お兄ちゃんの腕をグイグイとひっぱる私、でもお兄ちゃんは机の上に置いてあった薬とコップを差し出して言う。

「その前に薬をキチンと飲んで、そうしないと発作をまた起こしてしまうからね」

差し出されたお薬とお水……薬に頼らなければ、普通に暮らせない私の身体……何時もお母さんやお父さん、そしてお兄ちゃんに迷惑ばかりをかけている……

「……うん」

少しでも私は哀しくなってしまう……どうして私は、こんなにも身体が弱いんだろう？ もっと元気だったら、お父さんやお母さんに迷惑をかけることも無ければ、お兄ちゃんともっと一緒に居る事ができるのに……

お兄ちゃんに差し出された薬を、コップに注がれている水でコクコクと私は飲む……何時もの苦い薬の味、それを飲み込む水の味がなんだか少し変な感じだけ……早く薬を飲んで、お兄ちゃんとお祭りに出かけなければ……そう思って、私は薬と水を一息に飲み込んだ。

「んぐう、んぐ……ぷはあく！ 全部のんだよ、だからお兄ちゃん、早くお祭りに行こう！」

水の入っていたコップをお兄ちゃんの方へと戻し、私は再びお兄ちゃんの腕を掴ん

で引つ張る。そして私とお兄ちゃんは、近所の神社で行なわれている夏祭りの会場へと向かった。

初めてのお祭り、その全てが楽しくて、兄ちゃんに手を引かれ、私がお兄ちゃんの手を引いて、私とお兄ちゃんの二人は夜店を見て回る。

普段なら不衛生だと言って、食べさせて貰えない夜店の飲物や食べ物を、お母さん達には内緒だよと言って、お兄ちゃんは食べさせてくれた。

カラフルなトロピカルジュース、冷たくて甘いカキ氷、イチゴ飴にバナナチョコ、金魚すくいの夜店でとった金魚を二匹と水ヨーヨー……楽しい時間は、夢の様に過ぎていった。

そんな楽しい時間が過ぎていく途中で、私は急におしっこをしたくなる。

お兄ちゃんに……『おトイレに行く……』と言う一言を言うのが、なんだか恥かしい……帰ってからおトイレに行こうと思いい、必死に我慢を続けたけど……どうしよう……だんだん我慢が出来なくなってくる。でもお兄ちゃんに本場の事を言うのは、恥かしくて言う事が出来ない……だから私は、とっさに嘘をついた。

「あの、お兄ちゃん……ちよつとごめんなさい、あの用事思いでして……あの、お友達に連絡を、携帯で連絡をしなくちゃいけないくて、すぐに戻ってくるから！ 少しでもここで待っていて！ ごめんなさい！」

わざとらしい言い訳……何もかもお兄ちゃんは解っていたのかも知れないけど、私はお兄ちゃんの返事を聞く前に、おトイレを探しにお祭りの会場を歩き回った。

そしてようやくに見つけた仮説のおトイレだったけど……おトイレの前には順番待ちをしている人達が列を作っていた。

「どうしてなの……漏れちゃうよ、うっうう……」

どんどんとおしっこは我慢できなくなってくる……その時に、私は思い出す。昼に来た時に、お兄ちゃんに連れられて見た場所の事を、神社の裏にある草むらの事を……アソコだったら、誰も人が来ないので、おしっこをしても大丈夫ではないのか？

そう思うと、私は耐え切れなくなって並んでいたトイレの列から離れると、大急ぎで神社の裏手の方へとかけ出した。

体験版は以上です。

以降は製品版を購入の上お楽しみください



